



Kekkaku 結核

▼ 読みたい項目をクリックしてください

Vol. 98 No.2 March-April 2023

- 原 著** 45……肺結核における菌陰性化までの治療期間を予測するスコアリングシステム ■筒井俊晴他
51……アンケート結果から見た、結核病床運営の課題と対策案 ■小野英也他
59……結核治療中の皮疹対策に関する調査 ■結核療法研究協議会内科会
- 短 報** 65……結核蔓延国出身者の検診をはじめとする結核患者発見 ■吉山 崇他
- 症例報告** 69……軟口蓋穿孔を認めた咽頭結核の1例 ■濱崎直子他
- 委員会報告** 73……結核患者（潜在性結核感染者含む）のための禁煙支援指針 — 呼吸器疾患との関連も含めて ■エキスパート委員会・禁煙推進委員会
- 会 告** 2023年度 結核・抗酸菌症認定医・指導医／抗酸菌症エキスパート 資格申請・更新受付について

肺結核における菌陰性化までの治療期間を予測する スコアリングシステム

筒井 俊晴 花輪 俊弥 島村 壯 秦 康貴
川口 諒 小林 寛明 柿崎有美子 宮下 義啓

要旨：〔目的〕肺結核診断時の臨床情報が菌陰性化までに要する治療期間に関与するか検討するとともに、治療開始前に予測できるか検討する。〔対象と方法〕2015年1月から2021年12月の間に塗抹陽性肺結核に対して当院で入院加療を行った123症例を対象とした。臨床情報として年齢・性別・病巣の拡がり・排菌量・空洞の有無・免疫低下を伴う合併症の有無・免疫抑制剤等使用の有無の7項目を挙げ、各項目における菌陰性化までの期間の比較と多変量解析を行った。〔結果〕病巣の拡がり・排菌量・空洞の有無の3項目が菌陰性化までの期間に関わる有意な因子であった。多変量解析で得た結果からスコアリングを作成し、スコアによって対象を4群に分類したところ菌陰性化までの期間の中央値は21, 35, 60, 118日であり各群間で有意差を認めた。〔結論〕病巣の拡がり・排菌量・空洞の有無の3項目が菌陰性化までの期間に有意に関連した因子であり、スコアリングを用いることで治療開始前から予測することが可能であった。

キーワード：スコアリングシステム, 菌陰性化, 病巣の拡がり, 排菌量, 空洞

アンケート結果から見た、結核病床運営の課題と対策案

¹小野 英也 ¹南方 良章 ¹川邊 和美 ¹東 祐一郎
¹佐々木誠悟 ¹村上 裕亮 ¹加藤 真衣 ²太田 文典

要旨：〔目的〕結核の低蔓延化に伴い、結核医療は不採算に陥っている。アンケートを通して一般結核病棟とユニット化病床の利点と限界について抽出し、病床運用に対する提案を行った。〔方法〕結核病床を有する全国の174医療機関にアンケート調査を実施し、経営面評価と運用実態評価の調査を行った。〔結果〕経営面の有効回答数は81施設で経営負担、減床必要性、減床可能性は一般結核病棟とユニット化病床で差は認めなかった。経営負担、減床必要性は、30床以上の病床を有する施設では30床未満の施設に比べ有意に高値を示した。しかし、稼働/基準比の多寡別で比較すると差は認めなかった。運用実態面の有効回答数は57施設で、病床数および看護師数はユニット化病床では結核病棟に比べ有意に少なかったが、看護師数/病床数比ではユニット化病床のほうが有意に高かった。病床利用率は病床の形態で差はなく、平均在院日数も差はなかった。病床規模、稼働/基準比の多寡別でも同様で、有意差を認めなかった。〔考察・結論〕ユニット化病床の活用は一般結核病棟に比べ病床利用率や経営負担の面で必ずしも十分な改善効果は認められなかった。今回、結核病床の健全な運営に向けた新たな対策案を提起した。

キーワード：結核、病床、経営、ユニット化病床、モデル病室

結核治療中の皮疹対策に関する調査

結核療法研究協議会内科会

要旨：〔目的〕薬疹は結核治療の障害となる有害事象である。日本における薬疹の状況を把握し、対応指針への一助とする。〔方法〕医療機関へのアンケート調査。〔結果〕2019年に結核療法研究協議会参加施設において結核治療を開始した症例のうち皮疹がありとして情報を収集した224例で、男性136例、女性88例を対象とした。年齢は、結核患者の年齢構成と違いはなかった。発症時の使用薬剤は、標準4剤のイソニコチン酸ヒドラジド（INH）、リファンピシン（RFP）、ピラジナミド、エタンブトール（EB）が138例、INH、RFP、EBの3剤が56例と大多数で、それ以外は30例であった。皮疹に気が付いて薬を減らした日から皮疹対策が終了し最終的な薬の決定に至るまでの日数については、最終的な治療に至るまでに死亡等および情報不明例31例を除く193例中、結核薬を変更しなかった例が97例、INH・RFP以外の中止10例、INH・RFPいずれか中止したが再開までの日数不明6例を除いた80例については、17例で14日以内、22例で15～30日、17例で31～45日、16例で46～61日、8例で62日以上と日数がかかっていた者が多かった。RFPが原因または原因の可能性のある例で5例リファブチン（RBT）が使用された。1例耐性化例が見られた。〔結論〕RFPが使えない例でもRBTを使える可能性があり、副作用対応で単剤治療による耐性化症例があることは、念頭におく必要がある。

キーワード：結核、薬疹、リファブチン、耐性化

結核蔓延国出身者の検診をはじめとする結核患者発見

¹吉山 崇 ²河津 里沙 ²内村 和広 ²大角 晃弘

要旨：〔目的〕 蔓延国出身者の結核発病対策として，大学，日本語学校，技能実習生の監理団体の対応を検討する。〔方法〕 監理団体に対するアンケート調査によって実情を把握した。〔結果〕 75,859名の在籍する989の団体で，112名の検診による発見の結核患者，48名の検診以外で発見の結核患者が報告された。技能実習生監理団体，日本語学校に比して，大学で患者発見率は低かった。〔結論〕 入国後早期の検診は患者発見にとって有効である。

キーワード：結核，蔓延国出身者，検診

軟口蓋穿孔を認めた咽頭結核の1例

¹濱崎 直子 ²山崎菜々美 ¹松岡 佑 ¹益田 隆広
¹三輪菜々子 ¹木田 陽子 ¹纈纈 力也 ¹上領 博
¹桜井 稔泰 ¹多田 公英

要旨：症例は37歳女性。背景疾患に多発動脈炎があり，プレドニゾロンとメトトレキサートを内服していた。主訴は咽頭痛と左耳痛。その後軟口蓋穿孔を認め，同部位から抗酸菌が認められ，結核と診断された。治療はイソニアジド，リファンピシン，エタンブトール，ピラジナミドで行い，症状は速やかに軽快したが軟口蓋穿孔は残存した。咽頭結核は非常にまれな疾患であり，その中でも軟口蓋穿孔は報告例が少ない。免疫低下状態の患者において咽頭痛などを認めた場合は鑑別疾患として結核も念頭におき，各種検査を行っていくことが必要である。また軟口蓋に一度穿孔してしまうと閉鎖まで時間を要することがあり，そのことから早期診断，治療を行っていくことが重要である。

キーワード：軟口蓋穿孔，咽頭結核，免疫低下

結核患者（潜在性結核感染者含む）のための禁煙支援指針

～呼吸器疾患との関連も含めて～

日本結核・非結核性抗酸菌症学会 エキスパート委員会・禁煙推進委員会